

昔むかしの大むかし、空に太陽はなくて、お月さまとお星さまたちだけが、空をてらしていました。ですから、大地は、ぼんやりとうす暗かったのです。

大地に、人間はいなくて、鳥と動物だけがありました。

ある日、エミューとツルが、大平原を散歩していたとき、けんかを始めました。おたがいに、たたいたり、引つかいたりしてけんかしました。

ツルはおこつて、エミューの巣に走って行くと、巣の中の大きな卵をひとつ取って力いっぱい投げつけました。エミューの卵は、たぎぎの山に落ちて割れました。卵の黄色い中身がたぎぎの上に流れて、明るい炎をあげて燃えだしました。すると、世界じゅうが、まぶしいくらいに明るく照らされました。

天に、ひとりのよい神さまがすんでいました。神さまは、明るい光で照らしだされた世界を見て、その美しさに驚きました。

「これは美しい」

神さまは、毎日こんな火を燃やしたいと思いました。そこで、その日から、神さまは、毎日たぎ火をしました。

夜のあいだに、家来の精霊たちにたぎぎを集めて積みあげさせます。そして、火をつける前に、明けの明星を使いに出して、「もうじき火をつけるぞ」と、地上のみんなに知らせます。すると、太陽が昇るのです。

ところが、やがて人間が生まれると、人間たちは、明けの明星の合図ぐらいでは、目を覚ましませんでした。そこで、神さまは、何かの音を立てて、眠っている者たちを起こし、太陽が出てくることを知らせなくてはいけないと考えました。

ある晩、神さまは、おんどりのグーグルガーガーが、高らかに笑うのを聞きました。

「うん、あいつなら使えるぞ」

神さまは、グーグルガーガーにいました。

「おまえは、毎晩、明けの明星が消え始めて新しい太陽が昇るときに、できるだけ高らかに笑って、みんなを起こすんだよ。もし、おまえがそれをまもらなければ、わたしは火を着けてやらない」

グーグルガーガーは、世界に光をもたらすために、毎朝、ありつたけ高い声で笑うことを約束しました。そんなわけで、その日からというもの、毎朝、おんどりは、グーグルガーガー、グーグルガーガーと、高い笑いをひびかせるのです。

子どもたちは、グーグルガーガーの笑い声をまねしてはいけません。グーグルガーガーがそれを聞いたら、気を悪くして、朝に笑わなくなりますからね。そうしたら、地上はまた闇にとざされてしまいます。